

中学生の性イメージと性教育に関する研究  
—ピア・エデュケーションによる性教育を通して—

鳥取大学医学部保健学科母性・小児家族看護学講座

植田 彩, 佐々木くみ子, 前田隆子, 鈴木康江

The effect of peer education  
—Sex education for young age—

Aya UEDA, Kumiko SASAKI, Takako MAEDA and Yasue SUZUKI

*Department of Women's and Children's Family Nursing, School of Health Science,  
Faculty of Medicine, Tottori University*

**ABSTRACT**

The purpose of this study was to clarify shaping of the effect of peer-group education about sexuality. The subjects were 135 participants who were junior high school students and 4 peer educators who were university students. As a result, the participants had an affirmative evaluation and a negative evaluation about this program. The affirmative evaluation was influenced by "Talking" in a group. "Talking" was influenced by "Listening" in a group. Peer educators got higher communication skills through their experience in creating this peer education program. This process helped to make a peer relationship in the peer educator group. This indicates that peer educators have to learn "Listening" skills for better peer-group education.

(Accepted on April 22, 2004)

**Key words :** sexuality, peer education, peer educator, young age

はじめに

近年わが国では、10代の性感染症 (Sexually Transmitted Infections) が急増し<sup>1)</sup>、HIV (Human Immunodeficiency Virus) の感染爆発が危惧されている。さらに、20歳未満の人工妊娠中絶件数も増加傾向にある<sup>2)</sup>。若者の性の問題が顕著になり、セクシュアリティに関する調査<sup>3-5)</sup>が実施され始めたが、それらは性行動や態度などの実態調査であり、行動や態度を決定する認知的側面

に焦点をあてたものではない。従来の性教育から脱却し、セクシュアリティの認知的側面も考慮した、若者に対する新しい効果的な性教育法の検討が急務である。

一方、現代社会は個人化が進行し、セクシュアリティに関しても同様に「性の多様性」<sup>6)</sup>が受け入れられつつある。セクシュアリティの問題は個人にゆだねられ、性行動を規制する社会的規範は揺らいでいる。それは同時に、我々が自分のセクシュアリティと真摯に向き合い、真に個人

表1 実施した性教育プログラム

学習内容	目的	活動方法	ポイント
ラポールゲーム	ラポール形成	グループゲーム	楽しく
私のイメージカラー	他者・自分の思い	グループワーク	傾聴し、非難しない
人間関係としてのセクシュアリティ	認め合う関係の大切さの理解	ディスカッション、パネル説明	人を好きになることを考える
セックスの目的と結果	性を真摯に考える	ディスカッション	自分の事として考える
AIDSの基礎知識	正しい知識獲得	ディスカッション、クイズ	わかりやすい明
性の意思決定	責任ある自己決定	ミニ劇、グループワーク	他者の意見を傾聴する
HIV感染を考える	エイズを身近に考える	HIV感染者の手記朗読	個々が静かに考える

化した道徳的な性行動をとる責任を課せられたことを意味するが、セクシュアリティと向き合うことは難しい。人間の性交渉が様々な社会的・道徳的・宗教的制約を受けて長い間タブー視されていたことや、正常で一般的性行動とされるオーガズムを獲得する行為が暗いイメージの言葉で表現される<sup>7)</sup>という歴史的背景は、セクシュアリティのイメージに影響し、自ら進んでそれと向き合うことを抑制していると考えられる。

今日、若者が自らセクシュアリティをみつめるための一つの方策として、ピア・エデュケーションやピア・カウンセリングが注目されている。ピア・エデュケーションによる性教育では、エドゥケーターがピア（仲間）の立場から正しい知識を提供し、積極的傾聴と問題解決スキルを用いて、対象者自身のセクシュアリティに関する考えや気持ちを明らかにし、自分自身で解決策が見出せるよう支援する<sup>8)</sup>。つまり、若者が自らのセクシュアリティを積極的かつ肯定的に認知し、道徳的な性的態度と責任ある行動をとることのできる力を育てるための性教育である。2000年に厚生労働省から発表された「健やか親子21」<sup>6)</sup>の主要課題の1つである「思春期の保健対策の強化と健康教育の推進」の具体的取組として、「同世代から知識を得るピア・エデュケーション（仲間教育）」は、性教育、薬物乱用防止のためにも有効であり、今後、ピア・カウンセラーの養成とピア・カウンセリングの実施など思春期の子ども自身が主体となる取り組みを地域において推進することが必要

である」とされ、ピア・エデュケーションへの期待は高い。特に、中学生は第二次性徴の発現を迎えることで、実体のある生物学的性（sex）にもとづいて自らのセクシュアリティを再検討するという人生における性的節目の時期<sup>9)</sup>にあり、ピア・エデュケーションの効果が期待される対象と考えられる。

このような背景をうけ、今回我々はピア・エデュケーションによる性教育を実施すると共に、より効果的な性教育活動への示唆を得る事を目的として調査研究を行った。研究は、まず中学生の性行動を決定する重要な要因である彼らのセクシュアリティ・イメージ（以下、性イメージ）を、次に、中学生のピア・エデュケーションの体験の構造を、さらに、エドゥケーターである大学生のピア・エデュケーションの体験の構造を明らかにするという3段階の枠組みとした。

## 調査方法

### 1. 対象および方法

対象は、公立中学校に通う中学生137名とピア・エデュケーションによる性教育を1年間継続的に中心的役割をとって実施した女子学生4名であった。

中学生に対しては、本研究の対象となった女子学生を含む大学生18名（男1名、女17名）がピア・エドゥケーターとして性教育プログラム（表1）を実施した後、プライバシーの厳守と自由意志であることを伝えた上で無記名の調査を実施した。

質問紙の回収方法は個人が特定できないよう、会場を出る際に設置された回収箱に自ら投入する形式をとった。質問項目は松浦らが編集した「人格評価語感情表出語彙目録」<sup>10, 11)</sup>と和田の性態度尺度<sup>12)</sup>を参考に作成した性イメージ25項目、複数の研究者で独自に作成した授業評価10項目、グループワーク評価「自分の考えを話すことができたか」、「他のグループメンバーの話がきくことができたか」、「他のグループメンバーがあなたの話をきいてくれたか」、望ましい性教育提供者「誰からエイズ教育を受けたいか」、および性別であった。性イメージ、授業評価、グループワーク評価の各質問項目の回答には、「全く思わない」1点から「かなりそう思う」4点までの評定尺度を用い、望ましい性教育提供者については、あらかじめ設定された提供者の中から3人までを選択してもらった。回収は135名(97.0%)で、男子64名(48.1%)、女子66名(49.6%)、不明3名(2.3%)で、これら全てを分析の対象とした。

ピア・エデュケーションを実施した女子学生に対しては、1年間の活動終了時に、ピア・エデュケーターとしての活動で感じたことについて個別にインタビューを行った。面接内容は許可を得て録音した。

## 2. 分析方法

調査データの解析には、統計ソフトSPSS 10.0 Jを用いた。性イメージ25項目の男女比較にはT検定を用いた。性イメージ25項目、授業評価10項目それぞれについて因子分析を行い、因子を構成する項目の内的整合性の確認にはCronbach  $\alpha$ 係数を用いた。また、授業評価とその他項目の関連の検討には分散分析を、授業評価と性イメージの関連の検討には相関分析を用いた。グループワーク評価の各要素と授業評価との関連およびグループワーク評価の各要素の関連の検討には重回帰分析を、望ましい性教育提供者の男女比較には $\chi^2$ 検定を用いた。

ピア・エデュケーションを実施した女子学生のインタビューは内容を逐語録とし、客観的に分析するために複数の研究者で意味のあるまとまりを抽出し質的に内容を分類した。

## 3. 用語の説明

仲間(ピア)：年齢が近く、身体的にも心理的にもまた、社会的にも類似した立場にある者<sup>13)</sup>。  
仲間関係：同等性と互恵性をそなえた横の関係<sup>13)</sup>。

セクシュアリティ：性に関するあらゆる現象。生物学的、心理的、社会的性を包括した概念であり、人間の感情・思想・行為などの構造体系すべてにかわるもの<sup>14)</sup>。

## 結 果

まず、中学生の性イメージについて分析した。性イメージに関する各調査項目の得点の男女比較を行ったところ、「よい」、「上品な」で男子の得点が有意に高く、「かなしい」、「あたたかい」、「大切な」で女子の得点が高かった。項目全体で得点の高いものは、男子では「大切な」、「よい」、「真剣な」の順で、女子では「大切な」、「しあわせ」、「真剣な」の順であった(表2)。

性イメージ25項目の因子分析(最小二乗法、プロマックス回転)の結果、2因子が抽出された(表3)。第1因子は、「うれしい」、「しあわせ」、「楽しい」といった快感情を伴う情緒的な項目と、「興味のある」、「よい」といった積極的関心と肯定的価値判断の項目、および「大切な」、「まじめな」、「真剣な」といった真摯の態度と関連する項目で構成されており<ポジティブ性イメージ>と命名した。第2因子は、「いやらしい」、「きたない」といった醜悪な不快感情を表す項目と、「秘密の」、「うしろめたい」、「はずかしい」といった非開示的態度と関連する項目、「冷たい」、「重い」、「悲しい」といった冷めた感覚と感情を表す項目で構成されていたため<ネガティブ性イメージ>と命名した。因子を構成する項目のCronbachの $\alpha$ 係数は、第1因子 $\alpha=0.823$ 、第2因子 $\alpha=0.743$ であった。

次に中学生のピア・エデュケーションの体験を分析した。授業評価10項目を因子分析(最尤法、プロマックス回転)した結果、2因子が抽出された(表4)。第1因子は「楽しかった」、「知りたいことを教えてくれた」という本性教育プログラムの肯定的受け入れと解釈できたため<肯定的授業評価>と命名した。第2因子は「いやだった」、「気持ち悪かった」、「恥ずかしかった」などで構成され、本性教育プログラムの拒否と解釈されたため<否定的授業評価>とした。授業評価の因子を構成する項目のCronbach  $\alpha$ 係数は、第1因子 $\alpha=0.791$ 、第2因子 $\alpha=0.708$ であった。

グループワーク評価の3項目については、「自分の考えを話すこと」、「他のグループメンバー

表2 性のイメージ25項目の得点

番号	項目	男子		女子		
		mean	SD	mean	SD	
1	かなしい	1.34	0.58	1.58	0.63	*
2	真剣な	2.70	0.81	2.86	0.75	
3	きたない	1.63	0.62	1.69	0.64	
4	よい	2.75	0.84	2.40	0.70	*
5	上品な	2.09	0.67	1.77	0.58	**
6	かるい	1.91	0.64	1.86	0.66	
7	まじめな	2.63	0.89	2.67	0.86	
8	しあわせ	2.67	0.92	2.88	0.74	
9	みにくい	1.70	0.74	1.51	0.69	
10	はずかしい	2.45	0.91	2.62	0.82	
11	うしろめたい	1.81	0.59	1.94	0.77	
12	楽しい	2.39	0.80	2.34	0.78	
13	清い	2.13	0.74	2.11	0.76	
14	つめたい	1.78	0.71	1.49	0.56	
15	いやらしい	2.24	0.92	2.13	0.77	
16	秘密の	2.41	0.99	2.66	0.91	
17	きれい	2.07	0.76	2.38	2.54	
18	うれしい	2.36	0.88	2.53	0.76	
19	すげべな	2.43	0.91	2.25	0.85	
20	興味がある	2.54	0.85	2.26	0.71	
21	美しい	2.04	0.83	2.03	0.66	
22	あたたかい	2.25	0.96	2.58	0.73	*
23	下品な	1.95	0.67	1.72	0.60	
24	重い	2.23	0.99	2.35	0.98	
25	大切な	2.91	0.98	3.35	0.72	**

\*\*p&lt;0.01 \*p&lt;0.05

の話聞き、他のグループメンバーがあなたの話をきいてくれること」ができていたと思うかとの問いに、「まあそう思う」、「かなりそう思う」と回答した者を『グループワーク活発群』、「全く思わない」、「あまり思わない」と回答した者を『グループワーク非活発群』に2分し、授業評価の因子尺度値を2群間で比較した(表5)。3項目とも、グループワーク活発群の<肯定的授業評価>の得点が高かった。

グループワーク評価の3項目のうち、<肯定的授業評価>の得点に強く影響する要因を重回帰分析によって検討したところ、「自分の考えを話す

こと」が強く関連していた(表6)。また、「自分の考えを話すこと」は、「他のグループメンバーがあなたの話をきいてくれること」に強く影響されていた(表6)。

授業評価と性イメージにおける各因子尺度値の相関分析を行った。<肯定的授業評価>と<ポジティブ性イメージ>の相関は $r=.306$ 、<否定的授業評価>と<ネガティブ性イメージ>の相関は $r=0.496$ で、それぞれ正の相関があった( $p<0.01$ )。

授業評価の各因子尺度値について男女を比較した。<肯定的授業評価>の尺度値は男子 $2.80 \pm$

表3 性イメージ25項目の因子分析

項目	因子1	因子2	共通性
＜ポジティブ性イメージ＞			
うれしい	<b>0.875</b>	0.150	0.865
興味のある	<b>0.802</b>	0.054	0.783
しあわせ	<b>0.801</b>	-0.046	0.739
楽しい	<b>0.784</b>	0.099	0.769
よい	<b>0.706</b>	-0.036	0.783
清い	<b>0.646</b>	-0.185	0.741
あたたかい	<b>0.615</b>	0.067	0.592
美しい	<b>0.613</b>	0.026	0.592
大切な	<b>0.544</b>	-0.012	0.535
まじめな	<b>0.536</b>	-0.081	0.772
上品な	<b>0.421</b>	-0.137	0.643
真剣な	<b>0.267</b>	-0.004	0.724
きれい	<b>0.112</b>	-0.052	0.389
＜ネガティブ性イメージ＞			
いやらしい	-0.088	<b>0.768</b>	0.760
きたない	-0.181	<b>0.621</b>	0.647
スケベな	0.328	<b>0.598</b>	0.667
秘密の	0.241	<b>0.563</b>	0.618
みにくい	-0.221	<b>0.538</b>	0.686
うしろめたい	0.066	<b>0.524</b>	0.630
はずかしい	0.011	<b>0.477</b>	0.523
冷たい	-0.141	<b>0.436</b>	0.757
下品な	-0.301	<b>0.424</b>	0.554
重い	0.109	<b>0.365</b>	0.501
かなしい	-0.031	<b>0.250</b>	0.505
かるい	-0.001	<b>0.139</b>	0.544
固有値	6.073	3.342	
累積説明率 (%)	22.96	34.86	
因子間相関 (r =)		-0.158	

0.57, 女子 $3.12 \pm 0.48$ で, 男子より女子で有意に高かった ( $p < 0.01$ ). <否定的授業評価>は男子 $1.80 \pm 0.53$ , 女子 $1.71 \pm 0.45$ で, 男女間に差はみられなかった.

望ましい性教育提供者については, 全体では「大学生」を選んだものが最も多かった. 男女比較すると, 「看護師」は男子20.3%, 女子50.0% ( $p < 0.001$ ), 「大学生」は男子40.6%, 女子65.1

% ( $p < 0.01$ )と女子で選択割合が多く, 「医師」は男子39.0%, 女子13.6% ( $p < 0.01$ )と男子の選択割合が多かった.

最後に, 性教育を実施したエドゥケーターの体験を分析した. インタビュー時間は24~38分であった. ピア・エドゥケーター4人によって語られた内容は, 以下の5つの体験からなっていた. まず, 【ピア・エドゥケーター同士での話し合い】が

表4 授業評価の因子分析

項目	因子1	因子2	共通性
＜肯定的評価＞			
楽しかった	<b>0.798</b>	-0.023	0.648
知りたいことを教えてくれた	<b>0.666</b>	-0.034	0.458
おもしろかった	<b>0.659</b>	-0.056	0.458
ためになった	<b>0.618</b>	0.163	0.352
役に立ちそう	<b>0.555</b>	0.089	0.288
＜否定的評価＞			
嫌だった	-0.105	<b>0.712</b>	0.560
気持ち悪かった	-0.072	<b>0.704</b>	0.530
恥ずかしかった	0.300	<b>0.665</b>	0.420
怖かった	0.092	<b>0.536</b>	0.268
アホらしかった	-0.334	<b>0.425</b>	0.372
固有値	3.316	2.162	
累積説明率 (%)	33.16	54.78	
因子間相関 (r =)	-0.281		

表5 授業評価の因子尺度値のグループワーク評価による比較 (mean±SD)

	グループワーク (n=)	＜肯定的授業評価＞	＜否定的授業評価＞
自分の考えを話すこと	活発群 (86)	3.29±0.46	1.73±0.57
	非活発群 (40)	2.83±0.51	1.77±0.46
他のグループメンバーの話をきくこと	活発群 (59)	3.19±0.49	1.64±0.55
	非活発群 (64)	2.79±0.51	1.85±0.43
他のグループメンバーがあなたの話をきいてくれること	活発群 (72)	3.21±0.49	1.64±0.50
	非活発群 (53)	2.81±0.51	1.84±0.48

\*\*\*p&lt;0.001 \*p&lt;0.05

あり、この体験は、＜はじめた頃のしっくりしない感じ＞、＜時間的圧迫感＞、＜意見を言い合うこと＞、＜自分を振り返って、よりよく話し合えるように努力すること＞の4つの内容に分類できた。次に、学校の希望するピア・エデュケーショ

ン内容に反発を覚えながらも、妥協しながらプログラムを実施した【学校への反発と調整】の体験が語られていた。さらに【ピア・エデュケーションの実施】が語られ、これは＜自分に求められる役割を考え、工夫すること＞と＜緊張＞に分類され

表6 <肯定的授業評価>とグループ評価の重回帰分析

従属変数	R <sup>2</sup>	F値	独立変数	偏相関係数
肯定的授業評価	0.333	20.993 **	自分の考えを話すこと	0.309 **
			他のグループメンバーの話を書くこと	0.176
			他のグループメンバーがあなたの話をきいてくれること	0.050
自分の考えを話すこと	0.439	50.27 ***	他のグループメンバーがあなたの話をきいてくれること	0.353 ***
			他のグループメンバーの話を書くこと	0.191 *

\*\*\*p<0.001, \*\*p<0.01, \*p<0.05

た。また【良好な関係形成のためのコミュニケーションスキルの向上】が語られ、最後に【ピア・エデュケーションの意味づけ】として、<体験の自己への肯定的意味づけ>と同時に<対象への効力の不確かさ>が語られていた(表7)。

### 考 察

本研究では、性イメージを評価する質問項目として、妊娠、出産、中絶などの言葉は採用しなかった。イメージは外的世界を心の中に表出するシステムであり、感覚的な様相に依存するものである<sup>15)</sup>ため、具体的行為であるこれらの言葉は不適當である。また、性イメージの男女差は容易に推察されるが、男女を同じ次元で比較するために、あえて全データを因子分析に用いた。

まず、性イメージについて得点が高い項目の順序が、男女とも比較的類似しており、それらは性に対する真摯なイメージを表すものであったことから、第一に、中学生が最も強く抱く性イメージは真摯なものであることが示唆された。一方、男女差がみられた項目で男子の得点が高いものは性を現実的評価の対象とイメージする項目であるのに対し、女子では情緒性をイメージする項目となっており、男女の性差が示唆された。東・小倉<sup>16)</sup>は、セクシュアリティに関する規範は(セクシュアリティの秘匿性のため)その時代や文化によって変容しがたい強固な規範であり、セクシュ

アリティーにおける性役割のステレオタイプについて、男性は女性と比して肉欲的であり、女性は情緒的であると述べている。今回得られた結果は、中学生が既に性差を有する性役割規範を獲得している可能性を示している。ここでいう性役割規範とは性道徳や性倫理とは異なるものである。性教育が担うべきは、対象者が自ら持つセクシュアリティ規範を自覚した上で道徳的・倫理的に性行動を自己決定する能力の育成であると考えられる。

次に、中学生のピア・エデュケーションの体験を考察すると、中学生がピア・エデュケーションによる性教育のグループワークを活発に行うことができることと肯定的な授業評価とが関連しており、グループワークの活発さは効果的な性教育のための大切な要素と考えられた。中でも、ピア・エデュケーションによる性教育では、対象者が自ら話す体験が重要である。したがって、ピア・エデュケーターはグループワークにおいて対象者が自分の考えを他者に伝えることができるよう配慮する必要がある。また、対象者が自ら話すためには「聞いてもらえる」環境が必要であり、エデュケーターができる具体的援助行動の1つとして、グループの仲間であるエデュケーター自身が個々の対象者の話にじっくりと耳を傾けることの重要性が示唆された。このことは、ピア・エデュケーションにおいて積極的傾聴をはじめとしたカウンセリングスキル<sup>17)</sup>を実施者が獲得する必要性の確

表7 ピア・エデュケーターの体験

## 【ピア・エデュケーター同士での話し合い】

<はじめた頃のしっくりしない感じ>

当初のやりづらい雰囲気・意見交換の必要性の自覚・発言の躊躇

<時間的圧迫>

課題達成義務・焦燥感

<意見を言い合うこと>

意見表明と衝突から意見交換および建設的議論

<自分を振り返って、よりよく話し合えるように努力すること>

セルフモニタリングと表現方法の工夫

## 【学校への反発と調整】

教育内容の対立・教育内容や教育方法の調整

## 【ピア・エデュケーションの実施】

<自分に求められる役割を考え、工夫すること>

伝達方法の工夫・自己のモデル意識と模範的行動・ピアである自分の役割

<緊張>

不十分なディスカッション・心理的余裕のなさ

## 【良好な関係形成のためのコミュニケーションスキルの向上】

傾聴と受容の実践・相談者の自己解決を思案・客観的に聞く態度

## 【ピア・エデュケーションの意味づけ】

<体験の自己への肯定的意味づけ>

いろいろな経験・やり遂げた満足感・「得るもの」の多さ

<対象への効力の不確かさ>

提供できるものがあつたのか不安・自己満足の疑念

認とも言える。

また、今回実施したピア・エデュケーションによる性教育は、男子よりも女子でより肯定的に受け入れられ、好感をもたれていた。理由の1つとして男子における性役割規範が考えられるが、一般的に知られている男子の自己開示のし難さ<sup>18)</sup>から、話し合いを中心としたピア・エデュケーションを女子よりも肯定的にとらえられなかったと推察する。また、望ましい性教育提供者の男女比較によって、男子は女子よりも一般的に女性的イメージを持った看護師を望まず、男性的イメージを持った医師をより強く希望していたことから、ピア・エデュケーターのほとんどが女性であった今回のピア・エデュケーションが女子よりも男子

で肯定的に受け入れられなかった一因と考える。一方で、人は大集団よりも小集団で自らを語ることができる。男性であれ女性であれ、適切なコミュニケーション力は良好な性的人間関係の構築につながる<sup>19)</sup>ため、今後はより小集団でのピア・エデュケーションの実施、男性のピア・エデュケーターの育成など、男女ともにより受け入れやすい設定としていくことが重要である。

ピア・エデュケーターの体験については、活動の初期では人間関係が構築されておらず、くしっくりしない感じ>を持っていたエデュケーター達が【ピア・エデュケーター同士での話し合い】で互いにつづり、<時間的圧迫感>を感じながらも<意見を言い合う>過程を通じ、自らく自分を振

り返って、よりよく話し合えるよう相互に努力しながら、試行錯誤してプログラムを作り上げてきた体験を窺うことができる。これは、エドゥケーターの間関係が相互に成長し合う関係へと発展していった過程であり、互惠性のある仲間関係への発展とも言えるだろう。また、【学校への反発と調整】の体験は、ピア・エドゥケーターとは社会的立場が異なる学校の意向に接し、内的反発を感じながらも共通の目的のために妥協という選択を行った過程であった。【ピア・エドゥケーションの実施】では対象者から見た自分を意識し、＜自分に求められる役割を考え＞て行動しようとしていたが、対象者との関わりというよりはむしろ＜緊張＞した体験として強く残っており、自分達の＜対象者への効力＞は定かではないと感じていた。そして、これらの活動によって、日常生活において【良好な関係形成のためのコミュニケーションスキルの向上】を感じるという個人的体験をしていた。ピア・エドゥケーションを行うための全ての活動は個人ではなし得ない、性という人間の本質を考えながらの人間と人間の深い話し合いが基盤にある。このことが、エドゥケーター自身のコミュニケーションスキルを発展させたと考えられる。活動全体を通してエドゥケーターは真剣であり、真剣だったからこそ、困難や衝突がありながら仲間と深く話し合い、体験に＜肯定的意味づけ＞がなされたと推察された。

全体を統合すると、ピア・エドゥケーターの体験は、エドゥケーター相互の真剣な関わりを通してコミュニケーションスキルを向上させ、コミュニケーションスキルの向上は仲間関係をよりよくするという、循環的な関連が想定された。また、エドゥケーターの向上したコミュニケーションスキルによって、対象者は、仲間が話をきいてくれていると感じ、自らを語り、それが肯定的授業評価さらにはポジティブ性イメージへと関連していく構造が想定された。より効果的なピア・エドゥケーションとなるためには、エドゥケーターのコミュニケーションスキルの向上が重要な要素である。エドゥケーターのコミュニケーションスキルを向上させるためのトレーニングはもちろん必要であるが、今回ピア・エドゥケーター達が活動を通して自らコミュニケーションスキルを向上していたことから、エドゥケーターを援助する立場にある者は指示的にならず、エドゥケーターの力を

信じ、十分に力を引き出せるよう支えていくことも大切である。

## 結 語

本研究では大学生がピア・エドゥケーターとなって中学生に対し実施されたピア・エドゥケーションによる性教育を、実施者と対象者である大学生と中学生双方の視点から、その効果の構造を検討した。

対象者である中学生の性イメージは、ポジティブ性イメージとネガティブ性イメージからなっており、中学生が既に性差を有する性役割規範を獲得している可能性が示唆された。一方、中学生の本性教育プログラムに対する授業評価は肯定的評価と否定的評価からなっていた。肯定的評価はポジティブ性イメージと相関があった。同時に、肯定的評価は、セクシュアリティについてのグループワークにおいて、自ら話すことに影響を受けており、話すことはグループメンバーが話を聞いてくれたことに影響されていた。また、男子よりも女子で肯定的授業評価が高かった。実施者である大学生は、本活動を通してコミュニケーションスキルを向上させていた。このことが、グループワークにおいて対象者の話をよく聴き、セクシュアリティに関する語りを支える力となり、セクシュアリティの肯定的受け止めに寄与していたと推察された。

今後、より小集団でのピア・エドゥケーションの実施や男性のピア・エドゥケーターの参加、ピア・エドゥケーターのカウンセリングスキル向上などにより、セクシュアリティについて男女ともによりよく語り合えるプログラムをつくること、ポジティブ性イメージをもち、健やかな性行動を決定するために効果的であると考える。

## 文 献

- 1) 性感染症サーベイランス研究班, 熊本悦明, 塚本泰司, 利部輝雄, 他. (2002) 日本における性感染症 (STD) サーベイランス-2001年度調査報告一, 日本性感染症会誌, 13(2), 147-167.
- 2) 厚生労働省. 平成14年度衛生行政報告例人工妊娠中絶数, 年齢階級別・都道府県別.
- 3) NHK「日本人の性」プロジェクト編. (2002) NHK日本人の性行動・性意識.

- NHK出版, 東京.
- 4) 剣陽子. (2003) 福岡県の定時制高校5校における性行動・性意識調査. 日本性感染症学会誌, 14(1), 42-51.
  - 5) 橘寿好, 長谷川泰子, 村口喜代. (2003) 10代の性意識, 避妊, 男女交際の現状 初期人工妊娠中絶手術を受けた10代患者のアンケート調査より. 思春期学 21(2), 200-206.
  - 6) 厚生省, 健やか親子21検討会. (2000) 健やか親子21検討報告会-母子保健の2010年までの国民運動計画-.
  - 7) 石浜敦美. (1986) セックス・サイエンス性の分化から性行動まで. pp. 155-157. 講談社, 東京.
  - 8) 高村寿子. (2003) ピアカウンセリングの手法を用いた性教育の理念と方法, 思春期学, 21(2), 127-131.
  - 9) 無藤隆, 高橋恵子, 田島信元, 他. (1990) 発達心理学入門. pp. 50-52. 東京大学出版会, 東京.
  - 10) 松浦光和, 水上道雄, 今橋寿代, 他. (1979) 人格評価語感情表出語彙目録(1)-ア行～ナ行-, 駒沢大学社会学研究, 11, 111-125.
  - 11) 松浦光和, 中平浩平, 鈴木順一, 他. (1980) 人格評価語感情表出語彙目録(2)-ハ行～ラ行-, 駒沢大学社会学研究, 12, 57-62.
  - 12) 和田実, 西田智男. (1991) 性に対する態度および性行動の規定因(1)-性態度尺度の作成-. 東京学芸大学紀要第一部門, 42, 197-210.
  - 13) 子安増生, 内田信子, 落合正行, 他. (1992) キーワードコレクション発達心理学, 新曜社, 東京.
  - 14) 松本清一編. (2003) 母性看護学1 系統看護学講座 専門24 第9版第6刷. pp.12-13. 医学書院, 東京.
  - 15) 増井透. (1986) イメージ. 大島尚編, 認知科学. pp. 76-79. 新曜社, 東京.
  - 16) 東清和, 小倉知加子. (1984) 性役割の心理. pp. 55-57. 大日本図書, 東京.
  - 17) 松本清一, 高村寿子. (2001) 性の自己決定力を育てるピアカウンセリング, 小学館, 東京.
  - 18) 榎本博明. (1987) 青年期における自己開示性とその性差について, 心理学研究, 58, 91-97.
  - 19) 浅井春夫, 伊藤悟, 村瀬幸浩, 他. (2001) 日本の男はどこから来て、どこへ行くのか, 十月舎, 東京.